



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新聞成立期における新聞受容の前提について
Author(s)	江口, 豊; Eguchi, Yutaka
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 72, 95-108
Issue Date	2019-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73282
Type	departmental bulletin paper
File Information	MC72-5_Eguchi.pdf



《研究ノート》

新聞成立期における新聞受容の前提について

江 口 豊

0 序

17世紀初頭に最初の印刷形態の新聞がストラスブールで刊行され、その後ドイツ語圏のみならずヨーロッパに新聞が急速に普及した。新聞普及の前提の一つとして、受容者（オーディエンス）となる条件が当然検討されなければならない。商品でもある新聞を購入する経済的状況と並び、ふつう活字を読む能力が問題となる。ただし、当時の書記言語や活字利用の実態や習慣などから単純に識字能力という問題では処理できないのではないかという疑問も生じる。また、識字能力という概念も現代社会で想定されるように一様かつ平板なものではない。さらには、新聞報道の内容が読みたくなるようなものであるか否かは、本来読者が関心を持てるかどうかにも左右されることも踏まえてなければならない。

小論では、近世ドイツ語圏での新聞がどのように受け入れられたのかを考察する前提として、主として三つの点について検討してみたい。第一に読書する能力としての識字能力の概念である。第二に、近世期やそれに先行する時代での書記システムや15世紀半ば以降登場した活版印刷物利用を巡る状況についても、いわゆる読書研究の分野の蓄積から何かしら参考にすべきことが引き出せるかもしれない。第三には、近世ドイツ語圏でのコミュニケーション状況についての研究がもたらした概観を整理検討する必要がある。できればこの点をメディア効果論の視点から検討する可能性を考えてみたい。とりわけ識字能力が無いとされる社会層を中心にしたコミュニケーション形態について先行研究を再検討する。

1 識字能力という概念

識字研究については、「西欧の識字研究は膨大な蓄積をもってい」て、「識字率の差異とその原因を分析するために、地域、民族、階級、ジェンダー、コミュニティの構造、土地所有、社会移動、スクーリング、家族、家計、宗教、人口密度、都市と農村など、可能なかぎり客観的なデータを蒐集し、分析してきた」とされる（松塚/八楯2010, 6）。しかし、最終的には「なぜ

識字率が向上したのか、納得のいく説明が得られなかった」ために、「主観的な要因」として「誰が何のために文字を習得し、書物をどのように読んだのか」という点を問題にするようになったとも指摘されている（松塚/八鍬2010, 6）。識字概念についても、本来「識字を周囲の客観的な諸条件の影響を受けて変容する技術」という理解がされていたが、「言語そのものが特定の社会的・歴史的文脈とむすびついてより能動的な作用をもたらす」という面が重視されている（松塚/八鍬2010, 1）。

松塚/八鍬（2010, 3）は、識字能力という概念がリテラシーという用語に置き換えられ、「コンピューター」や「メディア」、「フィナンシャル」などの他の概念と結びつけられることで「基礎知識」の意味に理解される傾向があると述べている。さらに、単なる「読み書き・計算能力」の有無ではなく、「日常生活や生産活動、社会活動に参加することができる」か否かという見方から生じた「機能的リテラシー」という概念も紹介し、絶対的な意味で文字が読めるかどうかではなく、「社会環境の変化に応じて、その概念と到達すべき基準」を考えるべきことまで説明している。

松塚/八鍬（2010, 7）は、その一方で「識字研究と書物史」の問題点として「読む力と書く力を一体とする識字の概念は比較的新しい」と説明している。その根拠として、「十八世紀以前のヨーロッパの民衆にあっては、むしろ読む力こそが識字力であり、「これまで「文盲」として処理されてきた多くの民衆は書くことはできなかったが読むことはできた」と述べ、「婚姻時の自署率」を根拠にしてきたことを問題視している。「読むという行為は朗読し、謡い、演じる身体技法と分かちがたく結びついた」ものだという指摘も、後に問題となるScribner(1981)の議論とつながるものである。

こうした指摘の背景、根拠となったと考えられるのは、チボラ（1983）のような研究の蓄積が背景にあると考えられる。チボラは、読み書き両方ができる完全な識字能力所持者とそれがまったくできない人との間に中間の集団がいるという点をまず指摘し、その裏付けとして19世紀のヨーロッパ諸国の実例を挙げている（チボラ1983, 1）。1850年当時のロシア帝国では、読み書きがまったくできない人が、成人のほぼ90パーセントを占め、残りは読み書きともにできたことを指摘した後で、「しかし他の国ぐにでは半文盲が断然多かった。フランス軍新兵の教育程度に関する統計は、1881年から1900年の期間にわたる612万1018人中、8%が読み書きともできず、2%が読みのみ、87%は読み書きができてでも小学校は未終了だった」と述べている（チボラ同上）^{注1}。

チボラは14世紀から15世紀にかけてのヨーロッパの識字状況をいくつかの事例をもとに、「16世紀は、西欧全体に識字能力の加速度的進歩を見せた」と述べている（チボラ同上, 16）。具体的には以下の事例を挙げている。

- (1)13世紀末のミラノでは、推定人口6万人で、子供の教育に70人以上の教師があたったとする修道士の報告がある。これは人口1万人あたり教師が11人以上となるものとなる。

- (2)1338年に人口約9万人のフィレンツェで、8000名は1万人の男女児童が学校で読み書きを学習していた。これに加えて1000人から1200人の少年が6つの学校でそろばんを学んでいた。当時の出生・死亡率から、5歳から11歳の児童数が全人口の約25%となり、総数約23000人という数字になる。これに先ほどの読み書きする児童数を当てはめると「就学率」は40%以上となる。
- (3)1313年のフィレンツェに関する史料から、同市の工芸職人は日記をつけていた。
- (4)14、15世紀のノルマンディー地方で、多くの徒弟契約が、親方に食事、宿舎、衣類の他に学校への通学を義務付けていた。
- (5)南仏トゥールーズで、年少の徒弟が読み書きを習得するために、休日やほかの時間をもてるように公証人に委託されていた。
- (6)1535年パリ駐在ヴェネツィア大使の報告では、パリの総人口が約10万人で（5歳から14歳の人口は約25000人と推計される）、実際には少数の大学生を含めて約25000人の「学生」（初等、中等教育機関で学ぶ者を含めていることに注意）がいた。この大使の報告には「いかに貧しくともすべての者が読み書きを学んでいた」とある。
- (7)1525年エラスムスは、オランダ、ベルギー地域について「大勢の人びとが平均して教育を受けているのを、ほかのどこに行っても見られない」ほどと報告し、数十年後にギシャルディーニという人物も、「低地地方の国ぐにの大半の者が文法の初歩を習得しており、ほとんどの者が農夫でさえ読み方書き方を知っている」と述べている（チボラ同上,12ff.）。
- (8)アムステルダムで結婚手続きをした人々で自署した比率は、1630年で44%、1680年では57%だった（チボラ同上, 40）。

こうした諸事例は、同時代人の報告や記述、偶々教会等の公的機関の記録から推計した記述であり、社会全体をカバーする根拠に欠けた材料に過ぎない。したがって、チボラ自身これらのデータの扱いについては非常に慎重にとらえていることを繰り返し述べている。

さらに時代と場所が変遷するが、1467年から1476年の間に（イギリスの）主教区法院に喚問された証人116名中、四十数パーセントが識字能力ありとするデータについても、「幻想にすぎないか …… 特殊な観察例を不当に一般化」しているとエンゲルジング（1985, 67）も慎重な見解を示している。

2 ドイツ語圏における教育制度

識字に直接貢献するはずの制度が教育である。しかし、現代国家が自明の目標として目指すべき国民皆教育の実現は16、17世紀よりも後のことであり、これはドイツ語圏でも異なることはない。ドイツにおける教育制度の歴史についてFend(2006)にしたがって、重要な点に触れて

おこう。

まず13世紀以降にヨーロッパに大学設置の波が発生する。13世紀に大学が設置されたのは、イギリス（オックスフォード、ケンブリッジ）、フランス（パリ、オルレアン、トゥールーズ、モンペリエ、アンジェ）、イタリア（ヴィツェンツァ、パドヴァ、ボローニャ、シエナ、ナポリ、ローマ等）、スペイン（ヴァラドリッド、サラマンカ）、ポルトガル（リスボン）である。ドイツ語圏での大学設置は、1348年に創立されたプラハのカレル大学（神聖ローマ帝国内でありドイツ語圏とされる）や1365年創立のウィーン大学まで待たねばならない。しかし、その後1500年までの間だけをとっても、ハイデルベルク（1386年）、ケルン（1388年）、ヴェルツブルク（1402年）ライプツィヒ（1409年）、ロストック（1419年）グライフスヴァルト（1456年）、フライブルク（1457年）、パーゼル（1459年）、インゴルシュタット（後のミュンヘン）（1459年）、トリアー（1473年）、マインツ（1477年）、チュービンゲン（1477年）などと続く（Fend 2006, 71f.）。大学が増加したのは、宮廷や教会などで外交、内政に関連して法律や神学などの専門家に対する需要が増大したためというのが非常に大まかな説明である。Fend(2006, 101)は、14世紀から16世紀にかけて「聖職者、学校教師、判事、公証人、弁護士、宮廷や都市の医師などの知的な職業養成への需要はとてつもなく上昇した」と述べている。無視すべきでないのは、大学修了者が教育の分野でも活動する可能性がある点かもしれない。つまり識字の普及につながる初等教育の裾野を広げることに影響したのではないかということである。

大学の増設が手書きに頼っていた書記記録（もちろん書籍を含む）の大量の複製を求めることとなり、15世紀半ばの活版印刷術発明にも関係したことも考慮すべきである。

こうして増大した大学に比例して、当然在学する学生数も増大した。以下の数字はFend(2006,74)とエンゲルジング(1981,70)に基づいている。

【16世紀から17世紀のドイツ語圏の大学生数】

1500年代初頭	約3200人
1511年から1515年	4041人
1561年から1565年	4786人
1600年代初め	約7000人から8000人
1616年から1620年	7740人

*17世紀前半で学生増加が頭打ちになるのは30年戦争の影響と考えられる。

この時代の大学生はドイツ語圏以外でも在学、すなわち「留学」していたことを示すデータもある（エンゲルジング1981, 70）。大学の所在地はすべてイタリアである。

1600年から1601年のボローニャ大学在学のドイツ人学生数242名

1590年から1609年のシエナ大学在学のドイツ人学生数2555名

1590年から1609年のパドヴァ大学在学のドイツ人学生数3145名

こうした大学進学者の増加に伴い、Wittmann(2011, 114f.)は、「17世紀初頭にドイツ語圏には約5万人の大学修了者が生活していた」と述べ、「17世紀末には8万人」になっていたという推測をしている。少し時代は下るが、「1700年ごろには、ドイツの読書する受容者、それも潜在的なものではなく実際に読書をしている受容者はぜんたいでおよそ10万人だったと推計してもよいであろう」と主張している。

ドイツ語圏の教育制度史で、識字との関連でもっとも重要なのは、やはり宗教改革以降の時代である。なぜなら、文字通り「民衆の言語であるドイツ語を学習の媒体として導入することと、広範な民衆層の識字化」が宗教改革期に起こったからである（Fend 同上,111）。宗教改革が識字化の普及に貢献したとすれば、その前提として次の点が挙げられる。「誰もが独自に聖書を読むことで自らの信仰への接点を見出すことができれば、当然の帰結として、誰もが読めなければならない」（Fend 同上,115）。またアウクスブルク和議の原則*cuius regio eius religio*（領地を持つ者の信仰）にしたがい、領主たちが学校設立を進めることも生じた。そうした動きの一例として、ヴュルテンベルクの学校規則（1559年）制定を挙げている（Fend 同上,116）。また、エンゲルジング（1985, 92）も、「ドイツ国内で、一般就学義務が導入されたのは、ザクセン・コーブルク・ゴータが1642年、ヴュルテンベルクが1649年、ブランデンブルクが1662年」という年代を示している。しかし、やはり「これらの就学義務も、規定の上でこそ都市部ばかりか山間の村落にいたるまで拘束するはずであったが、それを全住民に及ぼそうとする真剣な意図を伴わなかったし、法令布告の目的が周知徹底されて実現されたこともなかった」。とりわけ農民の子弟は、農作業の労働力であって、学校に行くことで農作業が手薄になることから、住民自身が反対していた。実質的な意味での就学義務の実現としては、バイエルンでの1802年以降就学義務の法制化のように、19世紀以降のこととされている。

また近世でも存在していたラテン語学校については、識字率の普及には影響しなかったとエンゲルジングは指摘する（エンゲルジング同上,84）。その理由は、当時の権威主義的で強制的な教育方法と、商人、手工業者の子弟にとっての目的との教育内容の不一致だとされ、大半の子弟が中退していたとされる。

識字の一般大衆への普及の嚆矢が宗教改革期にあるとしても、それ以前の段階では学生や聖職者、果ては統治者の識字状況がどのようなものであったのかも興味を引く。しかしそこには意外な実態が確認されている。

まず学生の状況について、エンゲルジング（1985, 32）が、「ドイツの大学の授業は、学生が講義を聴きながら筆記することを前提にしていたが、学生の「大部分」が筆記能力を持つようになったのは、ウィーン大学だけにかぎってみても、ようやく15世紀半ばのことであった」とい驚くべき指摘をしている。

宗教改革以前の聖職者の状況についてエンゲルジング（1985,16）によれば、13世紀の教会（当

然カトリック教会)では、修道院の院長を含む構成員たちなどの聖職者でさえ識字能力に欠けていたことがわかっている。例えば西部ドイツのヴェストファーレンにあるミンデンという司教座聖堂参事会18名のうち文字の書けない者が1294年で3名いたが、30年後の1324年には14名中8名は文字を書けなかった。同様にボン修道院では1326年隠修士18名中16名は文字が書けなかったなどと紹介されており、これはドイツ語圏に限られたものではなかったらしい。

さらにまた宗教関係者のみならず、統治者についてもエンゲルジンは、「遅くとも14世紀に入ると、政治上の支配者たちも文書的な能力を持つことが当然とされるようになった」(同上,17)とあるように、それ以前は当然とすることができない状況だったことを示唆している。例えば「ハイデルベルク大学を創設した(1386年)プファルツ選帝公ループレヒト1世、それに1407年に没したヘッセン方伯ヴィルヘルム1世の二人は、高齢に達するまで読み書きができなかった」とされる(エンゲルジン同上)。16世紀以降はこうした例はさすがに見られなくなったようである。

3 ドイツ語圏等における識字状況を示す資料

Fend(2006, 117f.)によれば、宗教改革期以降教育の世俗化が進み、教育システムの世俗的主体(多くは領主等の統治者)が登場する。Fendは、スイスにおける識字率の推移について、von Wartburg-Ambühl(1981)^{注2}の研究を紹介し、表1のようにヨーロッパ各地のデータとの比較を示している。それによれば、プロテスタント教徒の地域では、「明らかにカトリック教徒よりもはるかに高い識字率を示していた」のは、宗教改革の目的、趣旨からいっても当然のことであろう。ちなみにカトリック教会が平信徒にも聖書を読むことを広めたのは1780年になってからとされている。因みに、18世紀以前に読書対象として問題となったのは、「聖者物語。カレンダー、文学的読み物、パンフレット、ノート、ポスター、一枚刷り(チラシ)」である(Fend 同上, 120f.)。なお、識字率調査のデータとしては新兵の徴兵検査があげられることもあるが、スイスでは19世紀以降が対象となる(Fend 同上, 126)。プロイセンでもやはりかなり後代になってから徴兵検査での識字調査が残されるようになった。16、17世紀では国民皆兵ではなく、もっぱら傭兵により戦争が行われていたためである。ただし、傭兵でも識字能力があるか否かは待遇にも影響することであったらしいことは、Peter Hagendorfという傭兵経験者の日記からも示唆されている^{注3}。

表1 17世紀から19世紀における欧州諸国男性住民の識字率

年 号	チューリヒ	イング ランド	スコット ランド	フランス	ドイツ 西部 — 東部
1600-1650	30-35%	30%	20%以下	20%以下	*5%?
1700	40%	40%以上	40%	25%未満	
1780	80%	50%	80%	40%	
1840					80-90% 50-60%
1870					90%以上 60-70%

(Fend 2011, 118より) *エンゲルジング(1985, 67)による。

エンゲルジング(同上,67)は16世紀のドイツの識字率を5%以上とし、読書人口も前の時代よりも増加し、「その規模は40万人から80万人」としている。エンゲルジングはまた、別のケースとして、1600年頃のハンプルクで書物や楽譜の購入者が4000人に上ったが、これは全人口4万人の10%にあたるというデータとなっている(エンゲルジング1985,68)。

さらに極端なケースの可能性もあるが、「1533年に北部ドイツのユーリヒ公国で、査察官が地方教区を視察し、司祭に秘蹟に関する諮問を実施。成績「良」が32名、「学識あり」はごくわずかであった。「学識もなく職務にも不適任」と評価された者は45名。試問は全部で105回実施し、75回では司祭たちの蔵書も検査したが、「この人々が職務の参考として備えている文書の類は驚くほどわずかである」。ただし、このとき教区民は司祭に満足していると回答していた。1550年の同様の査察では、241例のうち14例で司祭の無学やその他の理由から教区民は不満を示したとされる。1559年から1560年にかけて行われた査察では、「司祭がラテン語は知らないし、ドイツ語もほとんどできない、すなわち完全に無学であるという事例が二、三確認されている」(エンゲルジング同上,68)。

こうした識字に関する例やそれに基づく識字率を考える場合、出版物に占めるドイツ語の割合も民衆語としてのドイツ語を考えると一定の意味がある。1500年では出版物のわずか10%がドイツ語だったのに対して、1570年には30%に上昇し、1681年には50%を超えるまでになった(Fend 同上,130f)。

このようなドイツ語圏の識字状況は隣国オランダのアムステルダムと比較しても、進歩的といえる状況ではなかった。エンゲルジング(1985, 95)によると、アムステルダムの婚姻登録簿の記録調査に基づく識字調査(男性の方が女性よりも識字率が高い)では、17世紀の各年代を追うごとに改善が見られる。これはロンドンに関するデータでも同様である。「ロンドンに関する限り、シェイクスピア時代の民衆は約三分の一から半数程度が文字を読めた」(エンゲルジング同上,68)。

表2 アムステルダム市婚姻記録による識字率調査の変遷

	1630年	1660年	1680年	1730年	1780年
新郎	57%	64%	70%	76%	85%
新婦	32%	37%	54%	51%	64%

(エンゲルジング (1985,95) による)

第1章でも触れたとおり、こうした識字調査データはあくまで自身の名前が書けるか否かという点のみを反映するばかりで、そもそも字が読めたのか、朗読を理解できたのか、新聞などの書記内容や印刷内容をどこまで理解できたのかについても何も語っているわけではない。しかも、識字に関しては条件的に恵まれていたと考えられる都市部の例ばかりである。

4 近世における読書という行為

読書という行為についてはすでに多数の研究が蓄積されている。小論ではどういそのすべてを網羅できないが、16、17世紀という新聞成立期に読書がどう行われていたのかについて検討してみたい。もちろん、ここでの読書行為とは、厳密には読字行為を指すと考えるべきである。江口 (2018b,112) でも紹介したが、書籍と非書籍 (日常的印刷物) とはその機能の面では区別され、対象の違いはあっても、それに加えられる読むという行為は共通だからである。

読書という行為が時代とともに社会に拡大普及したことは、Zedelmeier(2001,25)が、「18世紀には、…… それまでまったく識字力のなかったかあるいはわずかしかなかった社会層住民でも読書能力が増大した」と述べている通りである。

それ以前、読書に関連することで重要な出来事として次の点が挙げられる。「12世紀以降、テキストとの実際的な関わりのためになる章立て、段落、索引などの補助手段が成立した。… 黙読と、それに結びついた書籍の形態や書籍利用のテクニック技巧が、より縛られない、より私的で個人的な、「より反抗力ある」読書を可能にした」Zedelmeier(同上,13)。これは、ラテン語で聖書を読むこととその内容を解釈することが、そもそも聖職者を中心に、ごく一部の教養層しかできなかったことに対して、例えば、「各家庭での聖書朗読を通じて、「教会の公的な信仰告知という独占状況が破られ、少なくとも部分的には自由化され」たことを指している (Zedelmeier 同上,18)⁴。

Zedelmeier(同上,20)は、学識を求める読書 (gelehrtes Lesen) という概念のもとに、「集中的に、できれば声に出して、いずれにしても繰り返し読む」ことを求めた17世紀の著作を紹介している。

また、エンゲルジング (1985,49) は、「15世紀における大衆の読書には、主として三つのや

り方、すなわち、自分の目で読むこと、他人の朗読を聞くこと、それに書物を眺めることという三種の方法があった」と述べている。そして、「宗教改革以後はこの事情が一変して、今や、目で読むほうが耳で聴くことよりも盛んになる」とも続けている（エンゲルジング 同上,50f.）。この三つ目の読書方法を裏付けるものとしては、挿絵の多さが挙げられる。活版印刷が発明される以前に木版の民衆本が多数刊行されていたが、それらには多くのイラストが添えられていた。活版印刷が導入された後も、例えば1476年に刊行されたラテン語とドイツ語の対訳本である『ウルム版イソップ物語』は125枚もの木版画が添えられている。「シュパイヤーのペーター・ドラッハが1476年に刊行した『人間救済の鑑』の中では、その内容である神と人性についての教えに関連して、「この明知は、学問のある者なら、文字だけの書物からも汲み取れるであろうが、学問のない者は俗人のためにつくられた、すなわち、絵で説明された書物によって学ぶべきであろう」と解説していることもこれを裏付けている（エンゲルジング 同上）。さらに、ラテン語版、ドイツ語版で別々に刊行された『阿保船』の序言で、セバステアン・ブランドも

「かりにも文字を嘲笑ったり あるいは文字を解さぬ者がいたら
絵を見て本当の意味を悟るであろう」

と書いていて、「自分の著作の読者として …… 、ラテン語で読む者、ドイツ語で読む者、木版画の助けを借りて理解する者という三つのグループ」を考えていた（エンゲルジング同上,51）。

読書行為に関連することがらで、見逃されやすい点をエンゲルジングが指摘している。それは眼鏡の普及である。眼鏡は主に読字行為（微細なものを観察する場合を除けば）に使用される道具だからである。

「眼鏡の職業的な製造やその普及は、どうやら活版印刷が始まってからの数十年の間に本格化した。あるいは、少なくともその当時になってから、ようやく人々の間に知られるようになったらしい。…… 1450年と1472年の資料によると、その頃フランクフルト・アム・マインには眼鏡職人が存在していたことがわかる。…… またニュルンベルクでは1478年以降にこうした職人のいたことが証明されており、1499年にはその数が早くも11人に達している。」これが時代を下ると、「1600年ごろに …… 業者の間にきびしい競争があった」とされている（エンゲルジング 1985, 46）。

5 読書行為と識字との不整合

先行研究から断片的に引用した読書行為に関する知見は、はたしてどこまで新聞の受容にも、適用できるであろうか。あるいは、17世紀初頭の新聞を読むという行為には、上に引用した読

書の実践様態や識字状況がどう影響したのであろうか。

まず書籍の発行部数や販売について考えてみたい。そもそも、書籍の出版制作、販売、保存・管理についてのデータも、実情が把握できるものが多いとは存在しないというべきであろう。断片的な情報例としては、エンゲルジング（同上,89f.）にも若干触れられている。販売に関しては、「1690年頃、出版業者が書籍を「数千冊」売り捌くために要した時間は、十年あるいはそれ以上であった」。江口（2014,11f.）でも紹介したが、書籍刊行は初期投資が大きなものである一方で、投資を回収するには長い時間が必要なものであった。その書籍の発行部数も、「17世紀フランスでは一版の発行部数を1000部から1500部とする書籍がもっとも多かった」とされているが、これはドイツでもそれほど違いがあるとは考えにくい（エンゲルジング 同上, 89f.）。なぜなら多くの書物がラテン語で著述されたもの、すなわち同じ顧客層をターゲットにしていたわけで、発行部数の多寡は刊行地ではなく刊行内容などに基づく見込みに左右されるからである。

発行部数を新聞に当てはめると、1650年頃のフランクフルト日報（Frankfurter Journal）が発行部数1500だったとされる。同時代（1660年～1664年）のライプツィヒの日報紙（Neu-einlaufende Nachrichten von Kriegs- und Welt-Händeln）の発行数はわずか204部とされ、「150部から200部でも堂々たる数字」と見られていた（Groth 1928, 238）。

エンゲルジングは読者層として、17世紀初頭「法律家、都市や宮廷の上級官吏、貴族など」を挙げ、「後になると、都市貴族、大学教授、大学生など」を加えたが、これは単独で年間購読ができた社会層だといわざるをえない（エンゲルジング 1985,89f.）。新聞の場合は共同購入という形態が珍しくなかったし、シャルティエ（2000, 388）も指摘するように、「自分で所有していないものの、借りたり、他人の家で読んだり、朗読するのを聞いた」場合は「把握することはできない」が、活字や書記の内容はその人間にも達する。

このように活字情報の普及について、「社会的身分や職業分類に従って」線引きがされるわけではないと考えるべきで、書籍に限らず「ある階層によって独占されていた読書など存在しなかった」と考えるべきであろう（シャルティエ 同上,390）。それは新聞にこそ当てはまると考えることはできないだろうか。新聞こそ印刷業者が低劣で安価な紙に単純なプロセスで容易に印刷でき、短期に投資した金額を回収できたものである。こうした新聞の広まりに警告を発した記述が複数確認されている。Johann Peter Ludwig（1679）は『最近の憂うべき新聞熱』で、「商人たちが新聞を読むのは妥当だと論じながら、一般の庶民には絶対に新聞を読ませたくない」と力説しているが、これは裏返しとして一般の庶民が新聞を読んでいたことを示している（エンゲルジング1985, 89f.）。また、Kaspar Stielerは1695年の著作で「およそ文字を読んだり、朗読を聴いて理解することのできる人なら、誰でも新聞を利用することができる」が、「下男や下女たちに向かっては、新聞に夢中になるよりは自分たちの仕事を真面目にやったほうがよい」と記している（エンゲルジング 同上, 90）。因みにStielerは、召使い、馬丁、庭師、門番、

職人、農民、作男などを庶民として挙げている。チューリングンの小さな領主に仕えた Ahasverus Fritzsch は、1676年の著作で新聞の民衆に対する悪影響について述べている。「ニュースを尋ねたり、ニュースを聴いたり、ニュースについて判断することほど頻繁に起こることはないし、男も女も、身分や地位を問わず、人々はこれに患っている。それどころか教会の礼拝の間でも、市役所の真剣な会議の間でさえ新聞が読まれている」(Groth 1928, 240)。

こうした普及を裏打ちする議論としてScribner(1981)も踏まえておくべきであろう。彼は近世期のコミュニケーションや公論を決定したのが活字だけではないことを改めて認識させた。彼が強調する(1)口頭コミュニケーション、(2)視覚的コミュニケーション、(3)行為としてのコミュニケーションが、たとえ識字能力にまったく欠けたり、不十分な者にとっても、いわば公共的コミュニケーションに組み込まれる可能性を示すからである。

6 結びに代えて

新聞の受容に関わる条件について、従来基準点とされていた事柄が相対的な概念であることを論じてきた。中核的な概念としての有効性は否定できないものの、識字能力や経済能力を前提にした所有は、読者やオーディエンスのプロトタイプ(典型)を示す指標であり、手がかりにすぎない。それはあたかも活字や放送が真の意味のマス(大衆)メディアとして力を振るい始めた1940年代の情報流通とメディア効果について「情報の二段階の流れ」をモデル化したラザーズフェルドの考えを想起させる。購入し、所有することができた人間から、その周囲の人々に、経路はいろいろあっても情報が流通した構図が重なるようにも思われる。文字通り opinion reader が opinion leader であったというべきかもしれない。なぜなら、印刷物等の所有と利用能力は、そうしたモノや能力の所有者に社会的威信を付与し、下の社会層から肯定的に見られていたと考えられるからである。Scribnerが指摘した口頭コミュニケーションということを考えれば、それはラザーズフェルドの調査同様、小集団内などの対面コミュニケーションを前提にせざるをえない点も重なるのかもしれない。^{注5}

そうしたことを前提にしなければ、新聞の成立と普及により「啓蒙期という時代が準備されることはなかったのではないか。「新聞はそれを、人々の多くがそれ以前に馴染みを持たなかった社会領域や生活領域に関する情報を提供することをまずおこなった」(Böning 2008, 294f.)。そして、江口(2013, 5)にまとめた新聞の影響は、活字情報の二段階目の流通拡大抜きには決して成立しなかったであろう。

「新聞が、学者以外にも」(ラテン語ではなく「それぞれの母語で非宗教的刊行物の読者層を生みだし、更なる定期的、非定期的刊行物のジャンルが発生する原因」(Böning 2008, 294)となることで情報の質的・量的拡大のきっかけになるだけでなく、「新聞が世界に関する知識と世界

の認識に役立つ専門的情報を」(Böning 2008, 295)時間をかけて定期的・継続的に伝えることにより、「国務や軍事を司るメカニズム」、すなわち「ヨーロッパに関係する諸事件の関連を理解させる」(Böning 2008, 295)という読者層の根本的変質を促したからである。1637年には「普通の人間が新聞により統治者を批判することを覚えたのだ」(Böning 2008, 297)という記述さえ確認されている。

参考文献

- チボラ, C. M. (佐田玄治訳) (1983) *読み書きの社会史* 御茶の水書房、東京。
(Cipolla, C. M.(1969) *Literacy and Development in the West*. Penguin Books, London.)
- 江口 豊(2013) 「ドイツ語圏活字メディアの歴史について—新聞を中心に—」(研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 17, 3-12.
- (2014a) 「ドイツ語圏における新聞の前身形態について」(研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 66, 59-71.
- (2014b) 「活版印刷術の展開と新聞成立の関連について」(研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 67, 1-22.
- (2015) 「駅通制度と新聞成立の関連について」(研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 68, 57-77.
- (2016) 「新聞成立期における印刷監督制度について」(研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 22, 95-112.
- (2017) 「多義的なメディア見本市通信 (Messrelation) — その成立と変質について —」
(研究ノート) *国際広報メディア・観光学ジャーナル* 25, 75-92.
- (2018a) 「見本市通信の受容について」(研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 26, 127-139.
- (2018b) 「近世神聖ローマ帝国におけるチラシについて」(研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 27, 111-128.
- エンゲルジング, R. (中川勇治訳) (1985) *文盲と読書の社会史* 思索社、東京。
(Engelsing, R.(1973) *Analphabetentum und Lektüre. Zur Sozialgeschichte des Lesens in Deutschland zwischen feudaler und industrieller Gesellschaft*. Metzler, Stuttgart.)
Edition lumiér, Bremen, S.287-310.
- 松塚俊三/八鍬友広 (編) (2010) 『識字と読書 リテラシーの比較社会史』昭和同、京都。
- シャルティエ, R.(2000) 「読書と「民衆的」読者」, シャルティエ/グリエルモ (編) 『ヨーロッパ読書史 読むことの歴史』大修館、東京、第10章, 387-406。
(Chartier, R./Guglielmo C.(eds.) *Histoire de la lecture dans le monde occidental.*)
- Böning, H.(2008) Zeitung und Aufklärung. In: Welke, M./Wilke, J.(Hrsg.) *400 Jahre Zeitung. Die Entwicklung der Tagespresse im internationalen Kontext*. Edition lumiér, Bremen, 287-310.
- Fend, H. (2006) Geschichte des Bildungswesen. Der Sonderweg im europäischen Kulturraum.
VS Verla für Sozialwissenschaften, Wiesbaden.
- Groth, O.(1928) Die Zeitung. Ein System der Zeitungskunde(Kournalistik)
Bensheimer, Mannheim/Berlin/Leipzig.
- Koszyk, K.(1999): Allgemeine Geschichte der Zeitung. In: Leonhard, J.-F./Ludwig, H.-W./
Straßner, E.Medienwissenschaft. Ein Handbuch zur Entwicklung der Medien und
Kommunikationsformen. Walter de Gruyter, Berlin/New York, S.896-913.

- Scribner, R. W.(1981) Flugblatt und Analphabetentum. Wie kam der gemeine Mann zu reformatorischen Ideen? In: Köhler, H. J.(Hrsg.) *Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit*. Stuttgart, S.65-76.
- Stöber, R.(2005) *Deutsche Pressegeschichte*. UVK, Konstanz.
- Weber, J.(1992) 》Unterthenige Supplication Johann Caroli / Buchdruckers 《 Der Beginn gedruckter politischer Wochenzeitungen im Jahre 1605. In: *Archiv für Geschichte des deutschen Buchwesens*, Bd.38, S.257-265.
- Weber, J.(1993) Daniel Hartnack – ein gelehrter Streithahn und Avisenschreiber am Ende des 17. Jahrhunderts. Zum Beginn politisch kommentierender Zeitungspressen. In: *Gutenberg – Jahrbuch*, 68, S.140-158.
- Welke, M.(2008) Johann Carolus und der Beginn der periodischen Tagespresse. Versuch, einen Irrweg zu korrigieren. In: Welke, M./Wilke, J.(Hrsg.) *400 Jahre Zeitung. Die Entwicklung der Tagespresse im internationalen Kontext*. Edition lumiér, Bremen, S.9-116.
- Wittmann, R.(2011) *Geschichte des deutschen Buchhandels*. 3. Auflage. C. H. Beck, Göttingen.
- Zedelmeier, H.(2001) Lesetechniken. In: Zedelmeier, H./Mursow, M.(Hrsg.) *Die Praktiken der Gelehrsamkeit in der Frühen Neuzeit*. S.11-30. Max Niemeyer, Tübingen.

注

- 注1 チポラの和訳では現在使用されない「文盲」などの表現が頻出するが、そのまま引用する。
- 注2 Von Wartburg-Ambühl(1981) *Alphabetisierung und Lektüre. Untersuchungen am Beispiel einer ländlichen Region im 17. Und 18. Jahrhundert*. Peter Lang, Frankfurt.
- 注3 Peters, J.(Hrsg.)(2012) *Peter Hagendorf – Tagebuch eines Söldners aus dem Dreißigjährigen Krieg*. V&R unipress, Göttingen.
- 注4 宗教改革以降も、聖書に関しては、「カトリック教会ばかりでなくプロテスタント教会の当局者でも、素人たちが監督されないまま聖書を読むことに対する留保があった」Zedelmeier(2001,19)
- 注5 近世期にはdigital divideならぬalphabetical divideがあったという言い方もできよう。

《research in progress》

On literacy as a prerequisite for the emergence of the newspaper

Yutaka EGUCHI

Recent research has discussed several points about the reception of newspapers in the 17th century, e.g. the price and the necessary economic conditions of a possible customers who could pay alone for a newspaper or buy one issue together with other citizens as a joint customer. However we must take into consideration that newspapers were not only read silently but also read aloud in an public or semi-public situations. The communicative system of the entire society needs to be newly conceived and we could then reconsider the information flow of the press. This could correspond to Lazarsfeld's two-step flow model. Without the involvement of illiterate people the vital function of newspapers for the Enlightenment in the following centuries would probably not have been achieved.